

## アミール・ツアルファティ

[ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる]

<https://youtu.be/TPH2fkqj2I>



信者はメシアの誕生を祝うべきか？主を信じるユダヤ人や異邦人は、この祭りを祝うべきか？多くの方が私に尋ねます。「アミール、あなたはユダヤ人なのに、どうして神に子がいるなんて信じられるんだ？」私たちは、2000年前の出来事を理解する為に、脳をリセットする必要があります。文字通り、人差し指で、ここ（こめかみ）を押して、そして、2000年前までさかのぼってみてください。

誤解や混乱を避けるためです。

「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。」

シャローム、皆さん。私はここ、ベツレヘムの街からそれほど遠くない、ユダ族の山脈にいます。私は今朝、ナザレの街の周辺からはるばる車を走らせ、車で約1時間半のこの場所に来ました。この時期、ユダヤ人はハヌカの祭りを祝い、世界中のキリスト教徒は、クリスマスをお祝っています。興味深いことに、ハヌカもクリスマスも、伝統的な祝日であって、



聖書が祝うよう命じているものではありません。これらは、主の祝日としてレビ記23章で言及されている



ものではありません。ハヌカとクリスマスは、どちらも、旧約聖書が書かれた後に起こった出来事を記念したのですが、それでも、世界中の何百万人もの人々がこの2つをお祝っています。非常に興味深いのは、ヨハネによる福音書10章22-29節によると、イエスご自身がエルサレムに来て、宮清めの祭りを祝いました。ヘブライ語でハヌカ。しかし、マカバイの為ではありませんでした。

または、ギリシャに対する勝利を祝う為でもなく、実際には、彼の神性について話す為でした。彼は、この機会を利用されました。彼は、聖書に基づかない祝日を祝う人々を非難しませんでした。「この祭りは、

レビ記 23 章には書かれていない。だから、ここに集まるべきではない！」と言って叱責される事もありませんでした。彼は、エルサレムに上って行かれ、聖書はヨハネ 10 章 22-29 節で次のように述べています。

“そのころ、エルサレムで、宮きよめの祭りがあった。時は冬であった。イエスは、宮の中で、ソロモンの廊を歩いておられた。それでユダヤ人たちは、イエスを取り囲んで言った。「あなたは、いつまで私たちに気をもませるのですか。もしあなたがキリスト(メシア)なら、はっきりとそう言ってください。」イエスは彼らに答えられた。「わたしは話しました。しかし、あなたがたは信じないのです。わたしが父の御名によって行うわざが、わたしについて証言しています。しかし、あなたがたは信じません。それは、あなたがたがわたしの羊に属していないからです。わたしの羊はわたしの声を聞き分けます。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて来ます。わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。」”

彼は、マカビー家の勝利について話すことも出来ました。彼は、神殿で起こったとされる奇跡や、ハヌカの燭台について話すことも出来たでしょう。これらのことのどちらも、彼の口にはありませんでした。彼が実際、人々に伝えることを選ばれたのは、事実、彼がしていること、そして彼が父の御名においてしていることが、人々が彼に押し付けようとした称号よりもはっきりと語っている、という事。とにかく、当時のユダヤ人組織の思いや心、思考、教えにおける救世主という称号は、イエスの人格にも、また、神の御子であり、受肉した神であるというアイデンティティーにも一致しませんでした。彼は、ただの油そそがれた人ではなかったのです。



2000 年前の出来事を理解するには、脳をリセットしなければなりません。そして、誤解や混乱を避けるために、ずっとさかのぼってください。私は聖書の預言について教えるのが大好きです。聖書のその部分は、とてもエキサイティングです。それは、主なる神がそのしもべである預言者たちに明らかにされた、将来の出来事について語っていますから。つまり、イザヤや、エレミヤ、ホセア…そして、興味深い事に、今日、私たちは聖書預言の次の展開に非常にワクワクしています。次に起こることについて、私たちは、ワクワクしています。私たちは、聖書が正確であることを知っていて、また、聖書が信頼できるものであることも知っています。そして、私たちは聖書が本物であることを知っています。しかし、2000 年前、彼らもまた、聖書預言の成就に興奮していました。今日の出来事が聖書預言の驚くべき成就であるように、2000 年前の出来事もそうでした。イエスがこの世に来られた時、それは聖書預言の成就でした。アモス 3 章 7-8 節。 “まことに、神である主は、そのはかりごとを、ご自分の

しもべ、預言者たちに示さないでは、何事もなさない。獅子がほえる。だれが恐れないだろう。神である主が語られる。だれが預言しないでいられよう。” イザヤ書 46 章 9-10 節。 “遠い大昔の事を思い出せ。わたしが神である。ほかにはいない。わたしのような神はいない。わたしは、終わりの事を初めから告げ、まだなされていない事を昔から告げ、『わたしのはかりごとは成就し、わたしの望む事をすべて成し遂げる』と言う。”

次のように言う人たちは、預言者の役割と、預言者のアイデンティティを軽視しています。「預言者の学校などに通えば、誰でも預言者になれる。」聞いてください。第二ペテロ 1 章 19-21 節は、次のように述べています。 “また、私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜明けとなって、明けの明星があなたがたの心の中に上るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。それには何よりも次のことを知っていなければいけません。すなわち、聖書の預言はみな、人の私的解釈を施してはならない、ということです。なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。”

それで思い出すのは、新約聖書で最も引用されている預言者です。つまり、預言者イザヤです。預言者イザヤは 687 年から 742 年にかけて預言しました。実際、彼の生涯で、ユダの少なくとも 3 人の異なる王が統治したと私たちは信じています。ヨタム、アハズ、ヒゼキヤ。そしてイザヤ (29:13) は、こう言っています。 “そこで主は仰せられた。「この民は口先で近づき、くちびるでわたしをあがめるが、その心はわたしから遠く離れている。彼らがわたしを恐れるのは、人間の命令を教え込まれてのことにすぎない。” イザヤは、最初の章から書全体を通して、イスラエル国民に警告しました。キリストが来る何百年も前に、彼は、イスラエル国民に警告していました。彼らは、実際には人間に従い、そして人間の教え、人間の教義に従っている。そしてイザヤは、それに対して警告しました。

さて、今日の私たちの聖句、クリスマスの聖句は、もちろん、イザヤ書 9 章 6 節です。 “ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。 主権はその肩にあり、その名は「不思議な (ペ・レ) 助言者 (ヨヴ・エツ) 力ある神 (エル・ギブ・ボ・ヴル) 永遠の父 (ア・ヴィ・アド) 平和の君 (サル・シャローム) 」と呼ばれる。”

多くの方が私に言います。「アミール、あなたはユダヤ人だ。どうして神に子がいるなんて信じられるんだ？」だから私は、いつも彼らに言います。「最後に聖書を読んだのはいつですか？」彼らは言います。「ああ、私たちはあなたの聖書は信じていないよ。私たちは、旧約聖書を信じているんだ。」私は言います。「私が言っているのは旧約聖書です。新約聖書の話ではありません。」

私が、イエシュアの信者になった時、私は、新約聖書からは一節も読まず、実際、預言書イザヤを読みました。しかし、イザヤ書だけではありません。箴言、ミシュレイ、30 章 4 節にも、 “だれが天に上り、また降りて来ただろうか。だれが風をたなごころに集めたろうか。だれが水を衣のうちに包んだらうか。

**だれが地のすべての限界を堅く定めただろうか。その名は何か、その子の名は何か。あなたは確かに知っている。”**

神の子の概念は、ユダヤ人の書物にとって、異質なものではありません。ラビの教えにとっては、異質なもので、彼らは、これらの聖句を無視しました。詩篇2章も同様です。詩篇、テヒリム、2章7-12節、“**「わたしは主の定めについて語ろう。主はわたしに言われた。『あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与え、地をその果て果てまで、あなたの所有として与える。あなたは鉄の杖で彼らを打ち砕き、焼き物の器のように粉々にする。』」**それゆえ、今、王たちよ、悟れ。地のさばきづかさたちよ、慎め。恐れつつ主に仕えよ。おののきつつ喜べ。御子に口づけせよ。主が怒り、おまえたちが道で滅びないために。” 素晴らしい。

では、どのようにして神に御子が持ち得るのか？その御子は、どのようにしてこの世に来る事になっているのか？ここでもまた、私は新約聖書を引用していません。それはイザヤ書7章14節です。“**それゆえ、主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける。”**

『インマヌエル』とは何ですか？インマヌエルとは、“神が私たちと共におられる”という意味です。なぜ？なぜ、彼は生まれたのか？

まず第一に、明確にしましょう。今の時代は、非常に明確にする必要があります。彼は男の子でした。聖書には、“性的流動性”はありません。さて、彼は、男の子として生まれただけでなく、彼は、私たちの為に生まれました。家族の元にだけ生まれた赤ちゃんとは違います。マタイ1章20-21節は言います。“**彼がこのことを思い巡らしていたとき、主の使いが夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ。恐れないうあなたを妻マリヤを迎えなさい。その胎に宿っているものは聖霊によるのです。マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。」**”

「彼は、あなたの息子になる為だけに生まれるのではありません。彼の名前を教えてください。そして、なぜ、彼がそのように呼ばれるか、その理由を教えよう。イエシュア、ヤシュア、彼は、彼の民を救うために来られる。」

イエスは、マリヤとヨセフの元に生まれただけでなく、彼は私たち、全国民、全世界の元に生まれます。イエスは、与えられました。購入されたのではなく、私たちに与えられました。それは無償の賜物で、彼は私たちに与えられました。救いは、どこでも買えません。罪の赦しは、どこでも買えません。人々が免償(めんしょう)を買っていた中世とは違います。当時、彼らはお金を払って、彼らの罪に対する書面による許しを受け取りました。いいえ。贈り物です。それは与えられた、ヘブライ語でいう「贈り物」、あなたが受け取るもの、購入していないものです。

では、誰が、誰にその子を与えたのでしょうか。ヨハネ 3章 16節 **“神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。”** もちろん、彼は世界を救うために来ましたが、彼を信じる者だけが、その恩恵を受けることができます。

彼は、生まれる前に名前が与えられた、唯一の王です。また、地上の両親が名付けたものではありません。そして彼は、全世界を救い、裁き、支配するという約束を持って生まれた、唯一の王でもあります。

では、信者はメシアの誕生を祝うべきでしょうか。彼を信じるユダヤ人や異邦人は、この祭りを祝うべきか？ええ、私も理解しています。今日、人々のクリスマスの祝い方には、非常に多くの異教があります。実際、よくよく考えてみると、毎年クリスマスシーズンには、キリスト抜きでクリスマスを扱ったハリウッド映画が次々と上映されます。良い人となって、良いことをして、見栄えを良くすることが全てです。そして、よく食べ、よく飲み、すべてが完璧...しかし、主が欠けています。主は、そこにおられません。彼らは、彼について話さず、彼らは、彼について言及しません。彼らは、主が誰であるか、なぜ主が来たのか、何のために来たのかについて、話しません。彼らは、主について誰にも話しません。しかし、彼の誕生を祝うこと全体のポイントは、その目的です。

さて、私たちは、主の誕生を祝うべきか？この、非常にハリウッドスタイルの、ねっとりとしたとんでもない異教の顕現に、参加するべきか？そこで私は言います。主ご自身の手本を真似てください。イエスが宮清めの祭り、ハヌカの日エルサレムに来られたとき、彼が、エルサレムに行って話したのは、マカバイ記やアンティオコスについてではなく、ハヌカのことでも、油の奇跡のことでもなく、ドレイドルについても、他の何でもなく、彼は、ご自身について話すために来られました。彼は何者で、以前は何者であって、何のために来たのか。彼が、季節を祝う理由です。そして、光の祭りの中で、彼はご自身が世の光であると語られました。彼はその宮清めの祭りで、彼が確かに、御父のものであり、御父とともに居り、御父の御子である事を語られました。

お祝いは、喜びと感謝の気持ちを表すものです。そして、私たちにとってメシアの誕生は、とにかく喜びと感謝の理由であるべきだと思います。ですから実際、私たちは、いつでも彼の誕生を祝うことができます。ルカ 2章 13-14節 **“すると、たちまち、その御使いといっしょに、多くの天の軍勢が現れて、神を賛美して言った。「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように。」”** イエスの誕生は、地上だけでなく、天でさえも、盛大に祝われました。そのような重要な聖書の出来事を祝うことは、主を知らずに例祭と安息日を祝うよりも、良い事です。さて、ユダヤ人として...ユ

ダヤ人として、ユダヤ人の王の誕生を祝わずにいれるでしょうか。私には理解できません。私たちは、この季節を利用して、その理由を語るべきです。

さて、クリスマスはシンボルでいっぱいです。星があり、贈り物があり、ツリーがあります... 正直なところ、私はそれらすべてが好きではありません。でも、皆さんが目にする星に関して言えば、黙示録 22 章 16 節は次のように述べています。 **“「わたし、イエスは御使いを遣わして、諸教会について、これらのことをあなたがたにあかした。わたしはダビデの根、また子孫、輝く明けの明星である。」”**

皆さんは、星を見ながら、輝く明けの明星の話をしませんか？

贈り物はどうでしょうか？誰もが、お互いに贈り物をしています。イエスが賜り物であることを、述べましょう。第二コリント 9 章 15 節 **“ことばに表せないほどの賜物（メシア！）のゆえに、神に感謝します。”** 喜びはどうですか？ **“ジョイ・トゥー・ザ・ワールド！”** 私たちは歌っています。聖書は第一ペテロ 1 章 8-9 節で、こう言っています。 **“あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。これは、信仰の結果である、たましいの救いを得ているからです。”** それが喜びの理由です。ジョイ・トゥー・ザ・ワールド！今や、私たちは、救ってもらえるのです。私たちの魂の救いがあり、すぐに、私たちの体さえ救われます。

ツリーはどうですか？ええ、私はツリーが崇拝されるのは、好きではありません。実際、それは忌まわしいことです。しかし、クリスマスツリーを見たら、次の事を考えてみてください。イエスは、いのちの木のように、聖書は黙示録 2 章 7 節で、次のように述べています。 **“耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。勝利を得る者に、わたしは神のパラダイスにあるいのちの木の實を食べさせよう。”**

考えてみてください。エデンの園に存在した命の源、神は、アダムとイブに「いのちの木から食べてはいけない」とは決して言っていません。神は、「善悪の知識の木からは取って食べてはならない。」とおっしゃいました。彼らは、いのちの木からは取って食べる事が出来たのです。しかし、彼らはそうしないことを選び、そして、彼らは食べてはいけない唯一の木の方を選びました。その時、いのちの木へのアクセスが禁止されたのです。それが今、キリストを通して、私たちは、いのちの木に戻ることができます。

ですから、この祭日の異教的な特徴に注目する代わりに、季節を使って、理由を語りましょう。第一コリント 9 章 19-23 節 **“私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷となりました。”** この姿勢です。彼らがこれらすべてのもので祝い、あなたが彼らの魂を勝ち取りたいなら、彼らを攻撃しに行くのではなく、それらを使って、彼らに救世主を説明してください。パウロがコリントの人達に何と言っているか見てください。

**“ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。それはユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人々には、私自身は律法の下にはいませんが、律法の下にある者のようになりました。それは律法の下にある人々を獲得するためです。律法を持たない人々に対しては、——私は神の律法の外にある者ではなく、キリストの律法を守る者ですが——律法を持たない者のようになりました。それは律法を持たない人々を獲得するためです。弱い人々には、弱い者になりました。弱い人々を獲得するためです。すべての人に、すべてのものとなりました。それは、何とかして、幾人かでも救うためです。私はすべてのことを、福音のためにしています。それは、私も福音の恵みをともに受ける者となるためなのです。”**

ですから、いつも非難して、怒り、常に非難し、常に問題視するのではなく…ほら、私たちは、あまりにも苦々しく、憤慨するようになっていますが、ピリピ人への手紙 4 章 4 節は、次のように述べています。 **“いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。あなたがたの寛容な心を、すべての人に知らせなさい。主（メシア）は近いのです。”**

主の来臨が近づくにつれ、私たちは、常に憤慨していないで、もっと喜び、もっと寛容であるべきです。イエスの誕生は、12 月 25 日ではないかもしれませんが。しかし、神をたたえます。主がお生まれになりました。

---

ビホールド イスラエル 日本語 YouTube チャンネル

<https://www.youtube.com/channel/UCLcuvG6Mr63Aqwi iXDkwRVQ>

日本語の聖書箇所は特記がされていない限り新改訳 2017 より引用しています。

聖書 新改訳 2017©2017 新日本聖書刊行会

メッセージの無断転載を固く禁じます。

Copyright © ビホールドイスラエル All Rights Reserved.